

「他者をつなぐとりなし手」を育てる留学生教育における日本語教育の役割

著者	柳沢 美和子
雑誌名	キリストと世界 : 東京基督教大学紀要
巻	22
ページ	114-124
発行年	2012-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1131/00000007/

「他者をつなぐとりなし手」⁽¹⁾を育てる 留学生教育における日本語教育の役割

柳沢美和子

(東京基督教大学准教授)

序論

文部科学省（以下「文科省」と略す）は2008年7月に「留学生30万人計画」を策定したが、その内容は、2020年を目処に留学生を、現在の13万人から、大学に在籍する学生総数の1割に当たる30万人に増やすというものである。

その目的は「国際競争力の維持・向上、人材育成を通じた知的国際貢献、……友好関係が深化し、ひいては世界の安定と平和に資する⁽²⁾」更に、「我が国を世界により開かれた国とし、アジア、世界との間のヒト・モノ・カネ・情報の流れを拡大することが必要であり、そのような『グローバル戦略』展開の一環として『留学生30万人計画』を位置づけ、（中略）今後5年間で大幅な拡大を目指すこととする⁽³⁾」

そして文科省は、優秀な留学生を獲得するためには、英語のみで学位が取れることが重要だとする一方、「日本語を全く学習しなくても良いことを意味するものではない⁽⁴⁾」つまり文科省自身も、留学生に日本語を学んでほしいものの、現段階ではどこまで日本語が必要なのか明確に出来ないのが現状である。

しかし留学生が、日本と日本人から良きものを学び、「日本に留学したことが誇りに思える⁽⁵⁾」ためには、日本語学習の果たす役割は決して軽んじられてはならない。東日本大震災の後、日本在中の外国人の方々から、日本国民が示した美徳

(1) 東京基督教大学学長・倉沢正則氏、東京基督教大学20周年記念行事主題講演「宣教200年に向かうTCUの使命」より、本人の承諾の下引用。

(2) 「『留学生30万人計画』の骨子」とりまとめた考え方に基づく具体的方策の検討、1頁。

(3) 同上。

(4) 同10頁

(5) 同12頁

——公共のモラル、正直さ、助け合いの精神等々——を賞賛する声が多く寄せられた。しかしこれらの美德は、留学生が実際に日本人のコミュニティーの中に足を踏み入れ、日本語を駆使して日本人と交わり、信頼関係を築いて行く時に初めて学んでもらえるものだと思う。

日本へ来ても日本語を話さず外国人のみと交わり、自身の目的を追求する「お客さん留学生」に留まるか、日本と日本人への愛に成長し、日本人の真の友となれるか——本稿では、その鍵となるのが日本語学習であると主張する。島国日本と言っても、多言語・多文化社会への移行が進むことは現実問題である。本稿では、留学生教育において日本語学習が果たす役割について「留学生30万人計画」の提案を考察し、次に筆者の所属する東京基督教大学の「アジア神学コース」を事例に日本語学習が留学生教育、および将来多文化共生社会に仕えることになるであろう日本の地域教会においてどのような意味を持つのかを考える。

1 「優れた留学生の戦略的獲得」——「30万人計画」が目指すところ

上の見出し——「優れた留学生の戦略的獲得」——は、文科省が作成した『「留学生30万人計画」の冊子』の第一章の標題である。「優れた留学生」に来てもらえるに越したことはない。しかし、なんのために「優れた留学生」に来てほしいのか。序章にも述べたように、人材育成を通じた知的国際貢献、また世界平和に寄与することを掲げつつ、同時に「国際競争力の維持・向上」のため「ヒト・モノ・カネ・情報の流れを拡大する⁽⁶⁾」つまりは国益——自国の利益の追求である。

そして世界の大学と競い、優秀な留学生を獲得するには「英語のみで学位が取れることが重要である⁽⁷⁾」とする。平成17年度において、英語による授業のみで単位を取得し卒業できる大学は5大学6学部、また大学院研究科は、平成18年度で57大学101研究科。よって文科省は、英語で授業を受け、英語のみで学位が取れるコースが大幅に増大することが必要だと主張する⁽⁸⁾。「日本で学んだ留学生がその能力を生かして日本で働き、日本の経済社会を日本人とともに支えていくことが望まれる⁽⁹⁾」。しかし英語のみで教育を受け、日本語を話さない留学生に、日本人と共

(6) 同1頁

(7) 同上

(8) 同上

(9) 同上

に日本の社会を支えて行くことはどこまで可能だろうか？ 留学生教育は、自国の経済に資する「人材」ではなく、「人そのもの」を育てることだということを受け入れ側は心すべきである。

2 英語か日本語か

先述のように文科省は、優秀な留学生を獲得するために、英語のみで学位が取れることが必要だと主張する。英語のみのコースについては、教員の英語力が十分かどうか懸念もあるようだが⁽¹⁰⁾、「国際化拠点整備事業」——いわゆる「グローバル30」に指定された13大学等、英語化への動きは既に始まっている。

従来日本に留学するためには、高い日本語能力に加え、英語等の外国語も必要とされて来た。つまり日本人学生の入試と同じ扱いである。大学入学には日本語能力試験1級程度——入学直後から、日本人の学生と机を並べて勉強できる日本語力が求められ、そのため資金が許す限り、まず日本で日本語学校に通い、大学進学を目指す——そのような留学生が少なくなかった。それが英語のみで良いということは、入学の時点で間口が広がることを意味する。これまでは中国・韓国・台湾と言った漢字圏・旧漢字圏からの留学生がほぼ80%に達するなど、圧倒的な割合を占めて来た⁽¹¹⁾。しかし英語ならば非漢字圏からも学生を募ることができる。

加えて、これまで日本語で行われていたため、大学の講義の内容は世界に伝わりにくく、よって評価されて来なかった。しかし英語ならば、より広く世界に実力を発信できる利点はある⁽¹²⁾。そしてよく言われる「キャンパスの国際化」——日本人学生にとって留学生の存在は、日本にいながらにして異文化体験を可能にし、日本人学生の英語力の向上にもつながる。国際感覚が養われ、新たな人的ネットワークも築くことができる⁽¹³⁾。

確かにこのようなメリットは期待できると思われるが、「国際化＝英語」という安易な英語至上主義に警鐘を鳴らす意見もある。明治期において日本の高等教育機関は、外国人教師によって、日本語以外の言語、多くは英語で教育が行われていた。しかしその後、夏目漱石を始め、欧米留学から帰国した知識人が日本語で講義を行

(10) 「グローバル30と今後の留学生活」『留学交流』2010年8月号、2-15頁。

(11) Higher Education Bureau, MEXT, 2007.

(12) 「グローバル30と今後の留学生活」『留学交流』2010年8月号、215頁

(13) 「『留学生30万人計画』の骨子」とりまとめた考え方に基づく具体的方策の検討、10頁

うようになった。福沢諭吉・夏目漱石などは、英語で知識を吸収しつつ、日本語でその成果を表し、その過程で日本語が国語として成立して行った⁽¹⁴⁾。酒井順一郎氏によれば、現在世界で、専門教育を自国語で行える高等教育機関は二桁に過ぎない。よって氏は、日本語で講義を行うことは極めて意義深いことだと主張する。逆に英語での授業が増えれば、日本語で高度な知的作業をする必要性は低下して行く⁽¹⁵⁾。教育機関として自国語で高等教育を行う能力を失うということである。

東京基督教大学において行われている神学教育においても、シンガポールにある三一神学院で教鞭を取るマイケル・プーン氏は、自国語で、自国語の文献を用いて高度な神学教育が受けられる日本は、アジアにおいて例外的に恵まれた存在だと言う。他のアジア諸国では、かつて植民地であった影響が神学教育にも及び、教会は献身者を養成するために欧米へ送らなければならず、神学校の図書館でも最新の資料は全て欧米から寄贈されたものである⁽¹⁶⁾。日本でも大学院レベルになると英語の文献が増えるらしいが、英語でその成果を発信して行くことは大切にしつつ、他が英語化に向かう中、安易な英語至上主義に走ってはならないと思わされる。

また「英語至上主義」は、留学生自身にもマイナスの効果をもたらす。日本人と交わらない、よって日本人の真の友となれないことは言うまでもないが、特に学生指導上、英語で指導できなければ、それを逆手に取られる可能性がある。日本人には英語コンプレックス——英語が苦手だという意識がある。そのように感じる必要は全くないと思われるが、実際、留学生が英語で応対して来れば、そこで態度を和らげる。もしくは何も言わない。結局は指導が成立しない。留学生はこうして、英語を話せば指導も免れる等「特典」に与れることを学んで行く。「英語至上主義」は人を育てるところか、人を甘やかし、駄目にして、母国に送り返す危険をもはらんでいるのである。

3 東京基督教大学の「アジア神学コース」プログラム

東京基督教大学では、2001年度より「アジア神学コース」が始まった。日本語

(14) 酒井順一郎「日本留学界の原点 日本語」『留学交流』2011年3月号、22-25頁

(15) 同上

(16) Poon, Michel. (2006). Theological Education and Nation Building: Seminary Teachers and Librarians as Partners in Mission in Southeast Asia. *Trinity Theological Journal* Vol. 14, pp. 124-139.

以外は卒業要件である 125 単位が英語で提供される 4 年制のプログラムである。ゴールは、本学の神学教育を通して世界、特にアジアに貢献する学生を育てること——教会と社会に仕え、母国との架け橋となる誠実な学生を育てることである⁽¹⁷⁾。「アジア神学コース」の「アジア」は「アジアで教育を施す」という意味であり、主に「アジアから」学生を募るという意味ではない。世界中から、アジア、特に日本という文脈の中で、神学とリベラルアーツを学びたい学生に、授業料・寮費を含めた特別奨学金を提供する⁽¹⁸⁾。2012 年 1 月現在、10 カ国 25 人が在籍している。国別に見ると、アジアからはインド、フィリピン、マカオ、ミャンマー（五十音順、以下同様）、アフリカからはウガンダ、カメルーン、ケニヤ、ジンバブエ、北米ではアメリカ合衆国、南米ではペルー、この他既に卒業した学生も含めると、インドネシア、スリランカ、ドイツ、ネパール、マレーシア等が加わる。卒業時には神学士の称号と、学生から希望がありまた必要な課目を履修すれば、日本語・日本文化（Japanese Studies）の副専攻を修了したことが認められる。

学生は 2 年間授業で日本語を学ぶ他、寮では日本人の学生と生活空間を共にし（留学生寮というものは存在しない）、殆どが二人部屋で日本人の同室者を与えられる。そして食堂で三度の食事を共に食し、昼のチャペル礼拝も通訳を通して日本人学生と同じメッセージを聞く。また「教会実習」という科目が全学生の必修であるため、原則として最初の 2 年間は英語を話す、もしくは日英バイリンガルの教会に通い、後の 2 年間は日本語を話す教会で実習を行う。

（１）「アジア神学コース」の日本語

先述のように「アジア神学コース」の学生は 1 年次・2 年次と 2 年間日本語を学ぶ。火曜日から金曜日まで週 4 日間、1 回 70 分、最も標準的なカリキュラム・進度である。ただ小規模校ゆえレベル別のクラスにできないので、語学に長けている者もそうでない者も一緒に授業を受けることになる。レベルの差は授業が進むにつれて顕著になり、結局は一番理解の遅い学生に併せざるを得ないので、漢字など早く進みたい学生には我慢してもらっているのが現状である。

個人差はあるが、日本語環境にいたので、総じて日本国外で学ぶ学生に比べて話す方は少し早い。一番の利点は、非言語の部分も含めて自然な日本語が身につくことである。しかし、読み書きは遅い。筆者の経験から、アメリカ合衆国・シンガポ

(17) “Our Commitment” at Tokyo Christian University (<http://acts.tci.ac.jp/commitment>)

(18) 同上

ール等国外で日本語を学ぶ学生の方が、文法も漢字も正確に、きちんと覚えて来る。本学の場合、個人差はあるが、「日本語は2年で終わる」という思いからか、習った端から忘れて行く学生が大半である。

中級後半ぐらいから、漢語（いわゆる音読みの漢字）を学び始め、以後その割合がぐっと増えることになる。つまり今まで「朝ご飯、昼ご飯」で済ませて来たものに「朝食、昼食」が加わる。漢語は語彙を増やして行く上で必須である。漢語を学ばなければ「朝ご飯、昼ご飯」は分かっても、「朝食、昼食」は分からない。漢字として学んでいなければ、耳で聞いても分からないからである。

本学の学生は、ちょうど漢語を学び始めたくらいの時点で必修の2年間の日本語が終わる。それ以降は日本語学習をやめてしまうものが殆どである。よって市役所等学外はもちろん、学内で配られる書類も読めない。また漢語が多く使われる「改まった場」では何が言われているか分からない。学内でも教会でも、通訳無しでは日本語の説教が分からない。もちろんそれぞれの教会で奉仕の場を頂き、牧師や教会員に愛され、感謝な教会生活を送っているが、それでも説教の意味が分からずただ座っているのは辛いようである。日本人学生との活動も、寮内での友達との交わりはまだ良いが、学生会など組織的に日本人学生と一緒に何かをすると言葉の壁にぶつかる。「総会」「承認」「訂正」、その他諸々「改まった場」で使われる語彙・漢語が聞き取れず、また読めないからである。

他方、先述のように、留学生が英語で対応すれば必要な指導も免れる——英語で話すのは苦手だと留学生を避ける日本人がいる一方、留学生と見れば英語で話しかける日本人もいる。最初はもちろん仕方がないし、日本語力がある程度上達するまで、事務上また学習指導上、複雑な会話はどうしても英語に頼らざるを得ない。しかし留学生と見れば英語、というのは、日本人が残念ながら、未だにその insularism ——「島国根性」から抜けきれないことの現れでもある。英語を使う機会がないのどにかく使ってみたい。自分の英語の上達のために少しでも英語で話したい。もしくは自分の英語が「堪能」であることを周りに示したい。つまりは「自分」が先に来るのである。留学生とコミュニケーションを取ろうとする意欲は感謝する一方、こうした自分優先の態度が、留学生が日本語を使う機会を奪ってしまう可能性もあることを、日本人は心しておくべきである。例えば、本学で留学生に敬語を教えても、留学生から「使う機会がない」と言われたことがある。教職員がみな英語で対応して来るからである。しかし敬語が出来なければ、日本人コミュニティーの中で人間関係を構築して行くことは難しい。田崎敦子氏は、日本人の指導教

員は英語を話していても、留学生に日本語の社会言語のルールを期待するのではない、よって状況に応じた適切な言語行動を教えることも、日本語教育の大切な一部だと指摘する⁽¹⁹⁾。日本の社会で人間関係を円滑に構築して行くためにも、適切な言語行動が取れるよう、また何よりも日本語で日本人と話して行くことを励ましたいと思われる。日本文化の特徴である目上への尊敬、礼儀、謙遜、そして周囲への思いやりなどは言語にそのまま現れるからである。

また学内での集会・教会の礼拝など公衆の面前で話す際は日本語で話したいという留学生もいるが、そこまで日本語力が追いつかないので、他人が訳した原稿を読み上げることになる。日本語でやりたいという思いは感謝する一方、所詮は借り物の日本語である。日本語で読み上げたことが本人の励ましにこそなれ、翻訳が本人自身に意味をなす日本語のレベルに達していなければ、読んでも聞く側の日本人には伝わりにくい（何を読んでいるか分からず、聞き取りにくい）。逆に完璧な日本語でなくても、自分の言葉で伝えた方が日本人には喜ばれる。つまり、心に伝わるということである。チャールズ・コワルスキー氏によれば、イラク戦争で米国が苦しんだのは、通訳者に頼らざるを得なかったからだという。13万の米軍のうち、少しでもアラビア語の知識があったのは、たった千人。氏は言う。「耳と口とが借り物では、どうして心を通わせることができるだろうか?」。他方、第二次世界大戦の沖縄戦で米国海兵隊の通訳者達は、発砲をやめ隠れている市民を探すよう仲間の兵士を説得し、日本人住民には自殺を思いとどまるよう呼び掛け、収容所では日本人捕虜に食料と医療がきちんと行き渡るよう司令官に交渉した⁽²⁰⁾。「アジア神学コース」の留学生も同様である。借り物ではなく自分の言葉として日本語を話し、日本人と心を通わせることができるよう励まさなければならない。そのため、日本語が2年で終わってしまう現行のカリキュラムも「アジア神学コース」のゴールに鑑みて再考して行くべきだと思われている。何故2年なのか、日本でどんな留学生を育てたいのか、それゆえどこまで日本語を学ぶべきなのか。日本語以外の学びが英語で提供されるとはいえ、「アジア神学コース」はアメリカの大学のクローン（増殖細胞）ではない。日本でしか学び得ないこと——何よりも日本と日本人への愛を養い、日本の教会から学び、仕え、養われ、遣わされる学生を育てることができな

(19) 田崎敦子「英語で研究活動を行う大学院における日本語教育の位置づけと方向性——理工系の留学生を中心として」『留学交流』2011年3月号、2-9頁

(20) Charles Kowalski. (2011). "Language, Conflict, and Peace." Paper presented at the Asian Conference on Language Learning 2011.

ければ、教える側もその責任を果たしていないということである。

(2) 卒業生へのインタビュー

2011年7月から8月にかけて、7月に卒業したばかりの（「アジア神学コース」の留学生は8月末に入学、7月に卒業）5人の留学生と、同じく前年の7月に卒業した留学生1名、計6名にインタビューを行った。出身国は、インド、カメルーン、ケニヤ、ジンバブエ、ネパールの5カ国、質問は、(1)日本に来て良かったか、日本から何を学んだか？ (2)在学中、日本語はどのような助けになったか、(3)震災は自分の考え方にどのような影響を与えたか？ の3つである。

それぞれが、留学して良かった、国際的な視野が広がった、と応えてくれた。実際に日本人に会い、その際日本語は日本人と関係を築く上で大きな助けとなった。

日本から学ぶことができたのは、(a)「空気を読むこと」の大切さ、つまり相手の気持ちを思いやること。(b)公共のモラル。地域で定期的に草取りをする、また個人レベルでも落ちているゴミをひろうなど、それぞれが市民としての責任を果たしている。(c)日本人の「頑張り」「忍耐」——一旦何かを始めたら、それを成し遂げるために努力を惜しまない。(d)日本人の「思いやり」——それはサービス産業における顧客への対応にも現れている。

被験者となった卒業生は、それぞれが日本人と良い交わりを築いてくれた。上記のように読み書きは苦手だったが、話す方ではそれを感じさせないくらいに上達し、帰国した学生もいる。しかし気付かされたのは、上記の日本人から学べる美德——公共のモラル、努力、助け合いの精神などは、日本人のコミュニティーの中に入り、共に労苦した留学生ほど、それを素直に見ることができる、ということである。

最初から日本を100%好きになれる留学生はいない。「ここが違う」「ここがおかしい」——まず気付くのは、慣れ親しんで来た母国の文化との違いであり、それは自然かつ必要なステップである。そうした健全な比較・批評を通して異文化における他者理解が進んで行く。が、その後批判に留まるか、批判を超えた所に日本の良さが見えてくるかは本人次第である。日本の欠点のみが目に入り「日本はおかしい」——自我が強く、プライドに捕われている間は先へ進まない。しかし、あらゆる人間関係に共通していることであるが、時には摩擦・衝突を経験しつつも、コミュニケーションを続けることによって、さらに相手を知る——他者理解が進む。そうして相手の良い所がもっと見えて来る。異文化理解も同様である。

特に三番目の質問、震災が自分に与えた影響にこの違いが現れた。被験者となっ

てくれた留学生の間にも、震災を利用した詐欺が横行しているなどマイナス面をま
ず挙げた学生もいた。他方、学内でも学外でも日本人と友情を培い、諸々の活動に
共に参加し、日本人牧師と共に地域教会に忠実に仕えた学生からは日本人の美徳が
多く聞かれた。

序章で述べたように、震災の後、日本在中の外国人の方々から、日本人の公共の
モラルに関する賞賛が多く寄せられた。その一つに、インターネットでも広く出
廻っていた「10 things to learn from Japan——日本から学べる 10 項目（私訳）」
があるが、ここには落ち着き、威厳、能力、品性、秩序、犠牲、優しさ、訓練、報
道に関するメディアの態度、良心という 10 項目が挙げられている⁽²¹⁾。例えば「威厳」
——人々は、支援物資をもらうために整然と並ぶ。「品性」——それぞれが必要な
ものだけを買うので、全員にものが行き渡る。「秩序」——略奪もなく、「やさしさ」
——レストランは食事を無料で提供し、無人の ATM から現金が持ち去られるこ
ともない。「良心」——停電が起こった時、人々は商品を棚に戻して静かに立ち去
った。無論、日本人として我々はこの逆も起こったことを見聞きしている。しかし
それでも、日本人は総じて、外国人の目に止まるだけの公共のモラルを実際に示す
ことが出来たということである。

被験者の卒業生の中にも、威厳、品性、秩序——上記の美徳を実際に体験した者
がいた。震災の翌日、近くの店に食料を買いに出かけた。母国での経験から、値段
が 3 倍、4 倍に跳ね上がっているだろうと、まず現金をおろしてから買い物に行っ
た所、値段は全く変わらず、人々はいつも通りレジに整然と並んで買い物をしていた。
当の本人はこれも母国での経験から、お米を一袋ではなく二袋買うつもりであつた
が、廻りの日本人が買いだめをしていないので、自分も一袋にした。そして大変い
い気持ちになった、と言うのである。また別の卒業生によれば、母国では、ヒンズ
ー教徒は震災のような事態になれば、全てを買い占めてしまう。しかし日本では、
特に宗教的でない人々でさえそのような振る舞いはしない。

日本人の美徳が見えて来るには、日本人への信頼がまず培われなければならない。
日本人コミュニティの中に入り、日本語を駆使して日本人と話すこと、摩擦を経
験しながらもコミュニケーションを続けて行くことが、互いの違いを受け止め、受
け入れる異文化理解・他者理解につながって行く。そうして日本と日本人への愛が
芽生えて来る。被験者の卒業生の一人も、文化の違いから、奉仕のやり方をめぐっ

(21) E.g., <http://www.actiblog.com/ueyama/197857>

て牧師とよく「議論」になった。しかし、その中で日本人の良い所がもっと見えてくるようになったと言う。

震災後一週間程、本国からの退去命令もあり、入国管理局も空港も満杯の状態だった。再入国許可をもらい、飛行機の空席を待って帰国するためである。友人・知人が次々に日本を離れようとする中で、本学の卒業生・現役生は日本に留まり、殆どが被災地でのボランティアに参加してくれた。日本人と共に苦しみ、日本人の真の友となることを選び取ってくれたことを感謝している。

(3) 地域教会と留学生

上記のように、「アジア神学コース」の学生は、教会実習が全学生の必修であるため、原則として最初の2年間は英語を話す、もしくは日英バイリンガルの教会に通い、後の2年間は日本語を話す教会で実習を行う。アジア神学コースのゴール——「教会と社会に仕え、母国との架け橋となる誠実な学生を育てる」ために、実習教会が果たしてくれる役割は大きい。奉仕の場を与えられ、神の家族の一員として愛されて過ごす。これまで、後半に日本語の教会に移ると、日本語が完璧に分からず、教会生活に積極的になれないまま卒業する学生もいたが、青年会や英語教室等大きな責任を任せられ、果ては日本語で説教奉仕までして帰国した学生もいた。

そうした学生の一人は、現在母国フィリピンで牧会している。牧師になる召しを抱いて日本にきたこの学生は、なぜ日本語を学ばねばならないのか最初は相当悩んでいた。しかし全ての課題を忠実にこなし、その後積極的に日本語を話すようになり、日本人のみならず、本学の韓国人の学生の中にも沢山の友人を与えられた。後半2年は日本の教会に仕え、牧師夫妻を「信仰の両親」と呼び、文化的背景も異なり、日本語も完璧でない自分を受け入れ、愛してくれた教会に「ご親切、忘れません」と感謝しつつ帰国した。2009年フィリピンが台風による洪水の被害に見舞われた際には、日本とのネットワークを通じて支援を呼びかけ、送られた義援金で被災者に支援物資を提供し、地域に非常に良い貢献をすることができた。このフィリピンの留学生の他、最後まで日本の教会にしっかり仕え、養われた学生達は、学内・学外を問わず日本人と良い交わりを築き、世界に遣わされて行った。その日本語力を買われて、海外のインターナショナルスクールで日本人の小学生に英語を教えている者、回教徒が90%を占める母国の高校で日本語を教える道が開かれた者——いずれも架け橋として、遣わされた地でキリストの香（新約聖書・コリント人への手紙 II 2章14節）を放っている。

本学学長・倉沢正則氏が昨年本学の 20 周年記念式典で「宣教 200 年に向かう TCU の使命」という講演を行った。以下はその引用であるが、「他者をつなぐとりなし手として」という見出しがつけられている。

キリスト教会は、老若男女や異なる人々が主イエスにあって一つとされる共同体です。教会こそが、多様な民族的背景をもった人々が共存する地域社会の形成に寄与できる集団だと言えましょう。異なる他者を受け止め、異文化を理解して共存と協力を可能にするのがキリストの福音であるからです⁽²²⁾。

教会が、「多様な民族的背景をもった人々が共存する地域社会の形成に寄与できる集団」になるためには、「他者をつなぐとりなし手」となる献身者を育てなければならない。「異なる他者を受け止め、異文化を理解して共存と協力を可能にする」——日本と日本人を愛し、日本の教会から学び、仕え、養われる留学生を育てなければならない。日本の教会で「他者をつなぐとりなし手」として養われた留学生が、多文化共生社会に仕える教会に遣わされ、共にキリストのからだを建て上げ、み国の同労者として地域社会に貢献して行く——そのような留学生を育てるために、日本語学習の果たす役割を決して軽んじてはならないと思わされる。

結 び

「留学生 30 万人計画」同様、「アジア神学コース」も学生募集の一環として始まった背景がある。しかし、留学生教育の第一義的な目的はビジネスではなく、人そのものを育てることである。自分の安寧は追求するものの、教会からは足が遠く「お客さん留学生」を育てるか、日本と日本人を愛し、日本の教会から学び、仕え、養われ、遣わされるとりなし手を育てるか——受け入れ側の責任は大きい。安易な英語至上主義に走らず、島国根性に捕われず、留学生が自分の心の言葉として日本語を話し、日本人と心通わせられるよう励まさなければならない。「他者をつなぐとりなし手」としての留学生が日本で養われ、地域に、世界に遣わされて行くことを心から願うものである。

(22) 倉沢正則「東京基督教大学 20 周年記念行事主題講演『宣教 200 年に向かう TCU の使命』」